

8 与論島におけるさやいんげんの新品種試験

○ 結果の要約

新品種「BN-137」は、慣行品種「ベストクロープキセラ（以下「キセラ」という。）」に比べ、初期収量は劣るが、樹勢が旺盛で開花数、着莢数ともに多いことから、露地栽培で21%、施設栽培で15%増収した。

「BN-137」は、「キセラ」に比べ莢の形状がやや短く、中間がやや丸く大きいことから、曲がりが少なく揃いも良くなり、秀品率も向上した。

1 課題の背景とねらい

与論島のさやいんげん栽培は、近年、12～2月期の低温、低日照により、収量が大きく減少することがある。そのため、冬春期の天候に左右されにくい品種がないか種苗メーカーに相談したところ、開発途中の品種があることが判明したため、当品種について露地抑制栽培及び施設促成栽培で検討した。

2 実証内容

(1) 設置場所

ア 露地栽培：与論町立長 イ 施設栽培：与論町那間

(2) 耕種概要

ア 対象作物：さやいんげん

イ 品種：雪印種苗「BN-137」, 「キセラ」

ウ 作型：露地抑制栽培, 施設促成栽培（ジベレリン処理）

エ は種日：露地抑制 令和3年10月30日

施設促成 令和3年11月19日（ジベレリン処理11月28日）

(3) 試験区の構成

ア 対照区：「キセラ」

イ 実証区：「BN-137」

3 調査結果

(1) 生育調査

ア 露地抑制栽培

樹勢は「キセラ」よりもやや強かったが、温度の高い時期の栽培については、樹勢が強すぎる傾向があるため、過繁茂にならぬよう肥培管理や水管理に注意が必要であった。

イ 施設促成栽培

露地栽培と同様の生育であった。



露地抑制栽培 (右実証区)



施設促成栽培 (右実証区)



着莢状況 (BN-137)

(2) 収量・品質調査

ア 露地抑制栽培

1 a (100㎡) 当たりの可販収量					単位 : kg
区名	1/上	1/中	1/下	合計	比較
キセラ	53	35	22	110	100%
BN-137	69	39	26	134	121%

イ 施設促成栽培



莢の形状(左「キセラ」右「BN-137」)

莢の揃い(左「キセラ」右「BN-137」)

1 a (100㎡) 当たりの可販収量													単位 : kg	
区名	1月			2月			3月			4月			合計	比較
	上旬	中旬	下旬											
キセラ	0	16	57	42	11	1	3	35	41	34	13	0	254	100%
BN-137	0	15	48	57	23	1	1	17	34	59	38	0	292	115%

4 考察

(1) 生育調査

露地抑制栽培及び施設促成栽培ともに、「BN-137」は「キセラ」よりも生育がやや遅く、樹勢は強い(過繁茂になりやすい)ことから、根の伸張性が高いと思われた。また、開花数、着莢数ともに多かったため、次年度は、基肥量や追肥量を加減することが必要だと考えられた。「BN-137」は、成り口が少し堅いため、取り遅れには注意が必要であった。

なお、メーカー談では菌核病に強いとされる「BN-137」であったが、露地、施設栽培ともに今作は天候が良く、「キセラ」と同様、問題になるほどの菌核病の発生はなく、発病程度の差は確認できなかった。

(2) 収量・品質調査

ア 露地抑制栽培

「BN-137」は、1月6日から収穫開始となり、「キセラ」より2~3日遅れての開始となったが、可販収量は「キセラ」の110kg/aに比べ、「BN-137」が134kg/aと21%増収した。

イ 施設促成栽培

「BN-137」、「キセラ」とともに1月14日から収穫開始となり、1月の可販収量は、「キセラ」に比べ、「BN-137」が14%減収したが、2月までの可販収量は、「BN-137」が13%増収した。2番花も1番花と同様の傾向であったことから、最終的な可販収量は、「キセラ」の254kg/aに比べ、「BN-137」は292kg/aと15%増収した。この要因としては、「BN-137」は「キセラ」に比べ、根の低温伸張性が高く、根張りに時間を要するため、初期生育はやや劣るが、それ以降は樹勢が旺盛で開花数、着莢数ともに多くなり、可販収量が増加すると考えられた。

また、「BN-137」は、露地及び施設栽培ともに、「キセラ」に比べ、曲がり少なく揃いも良く、秀品率も向上したことから、「キセラ」の代替品種として有望だと考えられた。

5 残された課題 新品種「BN-137」の最適な肥培管理の検討

6 執筆者 田中 慶